

「老が恋」

蕪村の句と古典

芳賀 徹 (国際日本文化研究センター)
HAGA Toru

老が恋わすれんとすればしぐれかな

これが蕪村の句としてどれほど知られている作なのか、私はつまびらかにしない。だが昔読んだときから心に残って、ときおり思い出しては口ずさむ。

蕪村の俳諧は「漢方薬」というのが私の説で、長く用いるうちに薬効があらわれてくるのが特徴だから、上の句についてもすぐにどこがどのようにいいと分析するのはなかなか難しい。だが、これを長く口ずさむうちに、一つのおぼろな絵のようなものが心に浮かび上っている。暗い薄墨の茫々とひろがるなかにわずかに代赭の色を点じたような抽象風の一帋である。

そのかすかな代赭のにじみにあたるのが「老が恋」なのだろう。「老が恋」とは日本古典のなかでいつごろから使われはじめた語彙なのか、いますぐには見きわめがつかないが、「老いらくの恋」と意味は同じでも、そのものつ脂^{やに}っぽさを抜いた美しい言葉だ。赤い炎のように燃える青年や壮年の恋ではないのはもちろん、灰のなかの燠火^{あきび}ほどの熱ももうないのだろう。世阿彌作と伝えられる謡曲『恋重荷』や『綾鼓^{あやのつづみ}』で、白河院の女御に身分違いのかなわぬ恋をして、そのために「恋の持ち夫^ぶ」となり「恋の奴^{やつこ}」となって、おろかにも絶望のうちに息絶える庭番の老人——あれほどのあわれな執念の劇も、この「老が恋」の語のうちにはもう含まれていないように思われる。

「さかさまに行かぬ年月^{としつき}よ。老いはえのがれぬわざなり」と、47歳になった光源氏が柏木にむかって説く（「若菜、下」）老いの自覚と老いの諦念が、「老が恋」のすぐ裏には宿されている。「老いぬる人は精神衰へ、淡く、おろそかにして、感じ動くところなし。心おのづからしづかなれば、無益^{むやく}のわざをなさず。身を助けて、うれへなく、人のわづらひなからんことを思ふ」との『徒然草』（第172段）の老人論も、もちろん一つの教えとしてよく心得、身にしみてもいるのだろう。

だからこそ、この「老が恋」をいま忘れようとする。だが、「わすれんとする」とは、つまり「忘れた」のではなくて、「忘れられない」からこそ忘れようとするのである。老いの身のなかの残り火は、消えそうでも消えず、消そうとしても消えないのだろう。かすれながらもなお代赭の色をともしつづけている、この老いの恋心を、われとわが身のうちにあしらいかねているときに、いつのまにかあたりには、あるいは窓の外には、晩秋初冬の雨の薄墨色がひろがり始める。

「わすれんとすれば」が、もちろんこの句のなかの鍵の言葉である。この表現は、さきほどから黙々とわが心のなかを見つめ、あれやこれやと思いつづけてきた時間の経過を示唆している。しかもこの鍵は両開きの蝶つがいのような両義の働きを持っているようだ。「わすれんとすればしぐれかな」とは、その忘却をうながし、「老が恋」をさらにも薄く遠く消しやるように降りは

じめた時雨なのだろうか。わびしい薄墨のひろがりのなかに代緒色の恋が遠のいてゆくのも、まことに美しい。

だが、講談社版『蕪村全集』第一巻の尾形仿、森田蘭氏の頭註によれば、この時雨には「巫山の雲雨の故事を利かせ」であるという。楚の懐王と夢に契った巫山の神女が、「旦あしたには朝雲となり、暮には行雨となって」あらわれて契りを重ねたという幻想譚である。なるほど、そのように読むのも面白い。ことに、この句を伝えた門弟吉分大魯あての蕪村の手紙に（安永3年〔1774〕9月23日付）、「しぐれの句、世上皆景氣〔叙景〕のみ案あんじ候故、引違ひきちがへ候ていたし見申候」と述べた上に、慈円の「わが恋は松を時雨の染めかねて真葛まぐずが原に風騒ぐなり」（新古今・11）の歌を引いて、「真葛が原の時雨とは、いさゝか意匠違ひ候」とも言っているのを読むと、尾形説には説得力がある。慈円の「松を時雨」には巫山雲雨の情への暗示はないようだが、それと違うという蕪村の方には、たしかにこの艶なる故事への連想があるのかもしれない。同じ大魯あての書簡には「塩からき」（わざと古くさい）趣向の句として――

狐火の燃えつくばかりかれ尾花

という、かえって老いらくの恋の再燃のあやうさをいうような近作も引かれていたのである。

とすると、「わすれんとすればしぐれかな」とは、前の解とは逆に、老が恋を忘れようとし、わすれかけもしていたのに、むしろその老いの恋情をまた呼び返し、うながしもするかのようにしとやかに、夕しぐれが降りはじめている、ということになるのだろうか。これも薄ねずみの雨のひろがりのなかに代緒の色がとも点っている点では同じだが、なにがしかの艶をおびて一段と美しいといえるだろう。

このように読んでくると、この蕪村の一句の遠景には「巫山」の故事ばかりでなく、詩人が自覚していたか否かは問わないでも、新古今の式子内親王のもっとも優艶な一首――

花は散りてその色となく詠ながむれば
むなしき空に春雨ぞふる

もあったのではないかと思われてくる。春雨と時雨の違いはもちろんあっても、一たび失われた、あるいは失われかけたものをよみがえらせて包みこむ雨の映像の働き、雨の心理作用のディアレクティブともいうべきものを、どちらもみごとに生かしているからである。この式子内親王や蕪村の雨にくらべると、19世紀末のフランス詩人の有名な「都に雨の降るごとく、わが心にも涙降る」などは、単純な一種の俗謡にすぎぬと見えてこよう。

「愁ひつつ岡にのほれば花いばら」の一句で蕪村に惹きよせられた私も、ようやく「老が恋」の句を味わう年ごろになったと、あらためて感じている。